

## 学生団体による報告

### 2021 年度活動報告 SLC-V (サービスラーニングセンター ボランティア)

リベラルアーツ学群4年 青木 大地 リベラルアーツ学群4年 原 実里  
リベラルアーツ学群3年 田本 志帆 リベラルアーツ学群3年 柳町 麻里亜  
リベラルアーツ学群3年 横田 桃子

#### 1. 団体概要

SLC-V では今年度の目標を「東日本大震災で得た教訓を生かすために、より多くの人に地震について知ってもらい、防災の重要性を感じてもらえるような活動を行う」とした。今回は以下のイベントを実施・参加して感じたことを中心に報告を行う。

- 和紙キャンドルを灯し東北の方の思いをつたえるイベントに参加「キャンドルイベント」
- 地域のこどもたちに、防災について考えてもらうきっかけづくりのために行った「防災教室」
- こどもセンターの夏祭り企画のお手伝いの一つとしてポッチャを行った「夏祭りボランティア」
- 災害の疑似体験や都市災害についての展示から災害への備えについて学んだ「フィールドワーク」

#### 2. 活動報告

##### (1) キャンドルイベント 参加日 2021 年 3 月 11 日

多摩大学主催の「和紙キャンドルガーデン」に参加した。和紙キャンドルガーデンは、東日本大震災で被災された方々の想いを届けるプロジェクトである。SLC-V で学んできた東日本大震災や防災の大切さについて来場者の方に伝え、東日本大震災で何が起こったのか改めて考えることを目的に参加した。多摩大学の学生が1枚1枚漉いた和紙に、東北3県の方からのメッセージを書いていただき、2011 年から 2021 年の10間にわたり、岩手県、宮城県、福島県の3県から約 2000 個のメッセージが集められた。それを和紙キャンドルとして灯した。



キャンドルイベントに参加したメンバー

被災者の方の想いや復興への明るいメッセージが和紙に込められ、多くの来場者に届けることができた。被災した方の想いや震災当時の出来事を後世に語り継ぐことの大切さを改めて強く感じられるイベントであった。また、会場には東日本大震災関連の活動をしている学生団体のブースが設けられ、SLC-V も来場者の方にアイリブルプロジェクトや東北でのフィールドワーク活動について紹介することができた。

##### (2) 防災教室 開催日 2021 年 6 月 13 日、11 月 28 日

今年度は、神奈川県相模原地域のボランティア団体「無料塾ひばり学校」(以下ひばり学校)の活動に参加する機会をいただいた。ひばり学校に通う小中学生の子どもたちを対象に、2回にわたって防災教室

を開催し、楽しみながら防災について学びつつ、子どもたちの防災意識を高めることを目的とした。

1回目の防災教室では、防災に関するクイズや災害時に役立つ工作を行った。2回目は防災すごろくを行い、災害の用語や避難の仕方、災害時の対応について学び、考えた。楽しく取り組んでくれた様子だったが、災害に関する用語が低学年には分かりにくかったり、盛り上がりすぎるあまり、説明を聞くべき時間とのメリハリをつけるのが難しかったり等、反省点があった。それらの点は今後の課題としたい。

東日本大震災の記憶を風化させないために、地域の団体での活動を通して子どもたちに防災の意識や知識を伝えることができ、有意義な時間となった。

### (3) 夏祭りボランティア 参加日 2021 年 8 月 22 日

町田市の「子どもセンターただ ON」の夏祭り企画に参加し、企画の一つとしてオリンピック・パラリンピックの競技でもあるポッチャというスポーツを夏祭り用にルールをアレンジしながら行った。今回のルールとしては目印となるペットボトルに投げたボールを一番近くに寄せた人から順番に得点が与えられ、それを2、3回行った総合得点で競うというルールのもと、競技を行うこととした。参加してくれた子どもたちへルール説明をした後、4人程度のグループに分かれ、競技開始となった。実際にやってみると、子どもたちの中にはポッチャのルールを知っている子や率先して行う子どもたちが多くいたため、複数回ゲームをすることができた。しかし途中参加の子どもがいたり等、事前に予想していなかったことが起こり、ゲーム進行が上手くいかない時もあった。事前準備の時に、起こりうるシチュエーションを考え対策を練っておくべきだったと反省した。反省点はあったものの、この企画を実施したことがきっかけとなり、定期的にただ ON で活動することにつながった。

### (4) フィールドワーク 参加日 2021 年 12 月 4 日

例年、フィールドワークは東北に行き、東日本大震災の被災体験を聴き、震災がもたらす影響を学んできた。しかし、新型コロナウイルスの影響で、2021年度のフィールドワークは横浜市民防災センターで行うこととした。

横浜市民防災センターは、様々な自然災害を体験しながら学ぶ機会を提供している施設である。震災を疑似体験することで、これまでと異なった視点や新たな知識を得て、より深く防災について考え取り組むことを目的としてフィールドワークを企画した。体験した内容は住宅に見立てた空間で地震、洪水が起きたことを想定し実際に行動してみたり、消火器の使い方を学んだ。また、風水害が起こる前後の自分の行動指針となる「マイタイムライン」の作成を行った。

このフィールドワークから学んだことは、一人ひとり備えるべきことが違うということである。住宅のある場所や家族構成によって事前に備えておくべき物、避難開始時間が全く異なるのだ。

そして、何よりも地震、洪水、火災、それぞれの災害に関する知識が必要であるということが分かった。

## 3. 総括

全体を通して、年度当初の目標を達成できたといえる。新型コロナウイルスの影響で、活動の場は限られていたが、前年度に比べ、対面での活動を増やすことができた。東日本震災から10年経った今、一から新たに震災について知ってもらうことを意識し、多くの方の目に留まるキャンドルイベントや、子どもを対象とした活動を行うことができた。今後も、SLC-Vの活動を通して、一人でも多くの方が災害と向き合い、安全を確保してもらえることを意識して活動していきたい。

## 2021 年度活動報告 桜美林大学ジェンダー研究会“*I am*”

健康福祉学群4年 安立 仲    リベラルアーツ学群4年 小野里 優香  
リベラルアーツ学群3年 板倉 友香    リベラルアーツ学群3年 熊谷 三奈  
芸術文化学群2年 原田 千鶴

### 1. 団体概要

桜美林大学ジェンダー研究会“*I am*”(以下“*I am*”)は、サービスラーニング科目である「地域社会参加(性別で差別しない社会)」の授業履修者を中心に2019年に立ち上がった。“*I am*”は、桜美林学生一人ひとりが自分自身と向き合い、人の多様性を尊重しあえるような大学にするため、学内外で啓発活動・講演会を行うことや自らの理解や社会の現状を学ぶことを主な活動としている。さらに、メンバー同士での勉強会やワークショップを随時開催し、様々なイベントでメンバー一人ひとりが主体的に活動できるような団体運営を行っている。団体名の“*I am*”は「俺」や「あたし」という性別が特定される主語を用いず、“*I*”-「わたし」というジェンダーフリーな主語を用い、社会におけるジェンダーの固定概念に惑わされずに「わたし」を表現してほしいという想いが込められている。

### 2. 活動報告

#### (1) 勉強会： 韓国の女性運動についてのミニ講義

韓国のフェミニズム運動について、メンバーが講師となってオンライン上でミニ講義を行い、メンバー同士で意見を交わした(2021年2月実施)。ミニ講義では、フェミニズムの定義や韓国で行われている女性運動を紹介し、その中でも「脱コルセット」運動を取り上げ、実際に運動をしている人の動画を見ながら、メンバー各々の目線にはどう映るのかを率直に話すことが出来る時間となった。ルッキズムについても触れられ、人の外見を褒めるのはルッキズムに入るか否かなど普段できないような話し合いもでき、それぞれの価値観を見つめなおすことが出来た。

今回はラディカル(急進的)フェミニズムを取り上げてミニ講義は行われたが、生き方は決まっているのではなく、自分自身で選択することが大切であると話はまとまった。「初めての発表で緊張もあったが、私の中に無い価値観に触れることができ、新しい気づきを得られた。」

#### (2) 合同勉強会(ジェンダー研究会×Otro camino)

2021年5月17日に“*I am*”と本学SDGsサークルOtro caminoのジェンダーチームと共同でオンライン勉強会を開催した。このイベントは団体同士の交流と大学生同士の意見共有の場を設ける目的で開催され、大学生の一般参加も募った。“*I am*”4人、Otro camino 5人、一般参加者5人の参加があった。

“*I am*”からは「女性専用車両」をテーマに、Otro camino ジェンダーチームからは「性差から考える男女の差と違いの捉え方」をテーマに発表し、各々の発表後にグループディスカッションで自分と異なる意見に触れるとともに、ジェンダーの問題は身近であり、かといって触れてはいけないものではなく、日常生活の一部に組み込まれているということを気付ける機会を与えることが出来たと考えている。実際に、参加した人からも、「ジェンダーという言葉は遠い距離にあるものと感じていたが、勉強会を通して得た知識を基に周りの友人と話してみようと思った。」という声を頂いた。

“I am”とOtro caminoとの交流、そして大学生同士の意見共有の場を設けるという目的で開催し、発表には知識不足などの不十分なところも見られたが、またこのような機会を設けてアウトプットの時間を増やしたいと考えている。

### (3) 相模原市立男女共同参画推進センター(ソレイユさがみ) パネルディスカッション

2021年6月26日にパネルディスカッション「大学生の身近に潜むジェンダー問題～大学生から見る「学び」「職」「暮らし」とジェンダー～」が相模原市立男女共同参画推進センター(ソレイユさがみ)にて開催され、“I am”から2名、グローバルコミュニケーション学群の留学生1名(香港出身)の計3名で登壇した。パネルディスカッションでは、事前のアンケート調査をもとに、大学生として率直な考えをパネルディスカッションに参加している人たちの前で発表することが出来た。アンケート調査では設問を“I am”の顧問である林加奈子先生と私たち学生で作成し、実際に本学の学生を中心に大学生100名に答えてもらい、分析も行った。

パネルディスカッションでは、「登壇者+大学生」という立場から意見を発表したが、社会に出る準備をしていくにつれ、よりジェンダー問題が身近に感じられるようになったという意見が上がった。また、今回日本の学生だけでなく海外出身の学生が登壇したことから、それぞれの意見を比較することで、より日本の性教育やジェンダー観に遅れがあることが浮き彫りになった。次回以降、このような機会があれば今回の反省点を活かし積極的な発言をしていけるようにしていきたい。

### (4) 「生理の貧困」パネル展示(ポスター作成)



多摩市立関戸公民館に展示されたパネル

TAMA 女性センターより「生理の貧困」に関するパネル(ポスター)作成の依頼があり、生理の貧困や生理自体についてまとめたポスター作りを行った。それぞれ掲載したい内容を文献やWebで情報を調べ、メンバーそれぞれでまとめた。コロナ禍であったため、オンラインで話し合いを進め、パワーポイント等を共有しながら行った。パネルは2021年7月1日(木)～7月15日(木)に多摩市立関戸公民館の市民ロビーに掲示された。

ポスター作りの過程で、生理の貧困は生理用品や鎮痛剤といった消耗品にかかる費用が大きな経済的負担になり起こっていることが分かった。また、コロナ禍によりアルバイトできる日が減ってしまった一人暮らしの学生が、必需品である生理用品を買う費用を削り買わない選択をしてしまうことも分かった。

今回の作業を通じて「生理の貧困」をとりまく課題を知ることができたことから、TAMA 女性センターが生理用品の無償配布を始めたことはとても素晴らしいと感じた。そして、ポスター作成を通して情報を伝えることに協力できたのは私たち“I am”にとっても良い活動であったと考える。

### (5) ジェンダー視点から分析する読書勉強会

『ジェンダーで見るヒットドラマ』という本をメンバーそれぞれが読み、日本・韓国・欧米で放送されたドラマについて議論を交わした(2022年1月6日実施)。話し合いを通して、韓国では家族意識が強いために、

恋愛や子どもの将来選択にも家族が絡んでいる様子がドラマでも演出されているが、欧米では逆に個人意識が強いため主人公が自己決定する場面が多い、日本はその中間であるなど、国別の社会背景にもジェンダーが影響していることがわかった。

日本では『きのう、何食べた?』などを含めた同性カップルを取り上げたドラマが増えてきているが、同性婚にシビアな世代がよく見るテレビを媒体としてなぜここまで浸透しているのかについても話し合った。話し合いでは、同性カップルが登場するものの、ストーリーでは同性カップルに重きを置いていないことがその要因にあるのではないかという意見が出た。

勉強会の第2弾として今後映画鑑賞会も計画している。実際に映画を見て、ジェンダーがどのように描写されているのかを話し合っていく予定である。

#### (6) 木塚さんの講演会: 「普通って何だろう? 私の普通とあなたの普通」

2022 年 1 月 11 日(火)、本学の卒業生である木塚淳さんを講師として迎えた『普通って何だろう? ～私の普通とあなたの普通～』を対面とオンラインのハイブリッド形式で行った。計 52 名の参加があった。「地域サービスラーニング(性別と社会)」を履修している学生8名と、“I am”が実施し、桜美林大学サービスラーニングセンター・相模原市立男女共同参画推進センター(ソレイユさがみ)との共催であった。

木塚さんとの打ち合わせは、“I am”から2名、授業履修生から2名の計4名で参加し、月に1～2回行った。初回は上記4名で顔合わせと話し合いを行った。講師との打ち合わせでは、内容決定と当日の役割、広報、他必要なものを確認し、他メンバーには授業や“I am”のミーティングにて逐一報告し、内容のブラッシュアップを図った。

講演会はジェンダーについての基礎知識の説明を皮切りに、木塚さんの今に至るまでのお話を聴講後、質疑応答の時間を設けた。学生だけでなく、教職員や市民の方の参加によって、様々な視点での質問が飛び交い、非常に有意義な時間となった。

コロナ禍での開催ではあったが、関心や知識をより広げていくためにも、このような場を来年度も設けていきたい。

### 3. まとめ

2021 年度の活動を通して、コロナ禍ではあったがオンラインを上手に活用してたくさんの活動や経験をすることが出来た1年になった。しかしながら、はじめてのことが重なったため、事前準備や知識に不足があったのも事実である。また、感染症対策の観点からオンライン活動が中心になり、直接会って活動する機会が少なかった。

2022 年度は、新型コロナウイルスの影響を見つつ、できる範囲で対面の行事も増やせればよいと考えている。前年の反省点を活かし積極的に勉強会や講演会を開催し、メンバー各自のやりたいこと、“I am”として活動していくべきことを明確にして活動を行っていきたい。